



Title	文学研究 - 生物学的、歴史学的 (1) 境界線上の試み
Author(s)	前原, 真吾
Citation	独語独文学研究年報, 27, 54-73
Issue Date	2000-12
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/26128">http://hdl.handle.net/2115/26128</a>
Type	bulletin (article)
File Information	27_P54-73.pdf



[Instructions for use](#)

1. 課題はなにか

西欧世界において近代的な自然科学の基礎が確立されてから現代にいたるまでの間に、自然は次第に生物学者や化学・物理学者など、技術的に資格を持った自然科学の専門家たちが扱うべき対象となっていく一方、人間の活動領域はもっぱら人文科学の研究対象であるか、文人や芸術家が扱う領域であると見なされるようになっていった。両者の間には明確な線引きがなされていき、医学を除いた自然諸科学は、主として人間が存在しない世界としての自然界の機構やシステムを探求し、人間の活動をその対象領域から排除することになった。人間を対象とする際にも、自然科学では、その精神作用や発明・発見などを成し遂げる創造力、感情の発現（笑い、泣き、怒り、感動など）といったおそらく人間特有の事象については棚上げにし、生物体としての物理的な機構にのみその焦点を当ててきた。科学者や科学者集団の活動記録である科学史や科学社会学も、基本的にはこの差異化にしたがったものであった。それは、近代科学として成立してからの自然諸科学の知の拡大を、社会や歴史あるいは世界についての認識と深層において相互作用してきたものと捉えて、その展開を科学者集団の内部における実践上の知的パラダイムの転換の過程などとして描きはするものの、実際には、そのパラダイム転換を生み出すような「人間の知的な創造性」そのものが作用する問題解決の過程には注目することがなかったのである<sup>1)</sup>。他方で、歴史学あるいは社会科学では、政治経済など社会制度の発展過程や諸々の社会活動が考察の対象とされてはきたものの、上記の科学史や科学社会学などを除けば、全般的に自然環境の事象やそれを取り扱う科学者の活動、その思想の歴史的な展開などは考察対象とされてはこなかったし、科学のみならず文学作品や他の芸術活動も含めて、人間の知的あるいは美的な創造活動や問題解決の過程がその中心に据えられることはほとんどなかった。長らく行動主義の伝統のもとにあった心理学でも、少数の例外を除けば事態はまったく同様であった<sup>2)</sup>。また文学研究では、そもそも人間の純粋な創造活動の成果のある特定の部分がその考察対象ではあったとはいえ、科学や技術の形而下の成果はこの範疇にとってまったくふさわしくないものであったし、あるいは文芸批評や文献批判という比較的限定された活動領域にあっては、精神の働きそのものや知的な創造性、およびそれらと相関するかたちで発現する種々の感情の意味やその生理機能の意味に関する合理的な究明などは、そもそも行ないえないものであった。さらに、文学史は本質的には文人や思想家の列伝であり、個々の文人と結び付いた思想や美学的なジャンル、表現技法の発展などによって構成される文学的パラダイムとでも呼ぶべきものの変遷を記述する分野であった。そこには、人間の知的な営みとその社会においていかに展開されてきたのかという問題を相対化し、価値観の変遷や科学と学問、芸術と宗教そして社会制度の歴史を総体として考察する視点は存在しなかったのである。

すでにここまでで明らかになっているとは思いますが、念のために確認しておくことにしよう。問題は次の二点である。まず第一点は、自然諸科学と人文・社会学の間の断絶があまりにも大きく、とりわけ人文科学の側に属している人間にとっては、いかにも回復し難い —— そもそも、これらが

以前にはひとつのものであったという前提に立つならばであるが——ように思われる、ということである。それは、一方では文学や歴史、社会の研究に従事する人間をして自然科学の探求の方法や理解に対して目を向けさせ、なおかつそこから有意な知識を抜き出すことを可能とするような、知的な基盤や研究教育の制度が存在しなかったことに起因する問題である。しかしこの断絶は、他方ではまた、人間の存在や活動をその観察対象である自然界から追放してきた、自然諸科学の問題設定の方法にも由来しているのである。つまり、人間の知的な活動や創造性、種々の感情を呼び起こす精神的な働きは「この範疇にふさわしくない甚だ不便な現象であって、“科学”は精神を科学的に考察するのを拒み、付帯現象、つまり物質的なメカニズムのたんなる副産物としてこれを尊大ぶって放り出し、まことに不合理なことであるが、精神やその産物が科学の領域外にある芸術における価値、芸術の仕事であることを宣言」<sup>2)</sup>してきたのである。それでは、文学や芸術をも含めた人間活動や美的な価値観などを研究対象とするはずの人文学者の側では、この精神活動やその産物についての詳細な考察を行なってきたであろうか。これが問題の第二点である。つまり、人間の空想力や創造性、問題解決といった種々の精神的な活動を、「社会におけるその機能や役割」および「内面におけるその具体的な作用過程」という両面から実証的かつ理論的に考察した研究は、人文科学の分野においてもほとんど見られないというのが否定できない事実なのである<sup>3)</sup>。というのも、芸術活動の領域には属さないと見なされていた自然科学的あるいは応用技術的な知の獲得は、従来から人文学者の関知するところではなかったからであり、また科学的な発見を成し遂げたり文学や芸術の「作品」を生み出したりするような人間の知的あるいは美的な創造性の原理や、それらによって呼び起こされるさまざまな感情などは、実際には20世紀も後半以降になってようやく得られた、とりわけ人文科学とは無縁の領域に属するものと考えられていた生物の進化理論や認識作用<sup>4)</sup>に関する生物学的・生理学的な見識がある程度なりとも援用しなければ、おそらく手掛かりさえつかめないようなものであったからである。そして、知的および美的な創造性や認識の作用がいかなる機構のもとに働いているのか、という点についての理解が得られる状況になれば、社会においてこれらが果たしてきたであろう具体的な機能や役割、あるいはその意味を偏向せずに究明していくことも、また困難であったからである。

しかしながら、逆にまさにこの点においてこそ、上記の二つの問題を同時に解消する可能性が存在しているとも考えることもできる。つまり、人間の認識作用に関して何らかの有意な理解を与えてくれるような生物学上の知識や研究成果を、精神活動やその「産物」を考察対象とする人文科学の中に取り入れることで、まず第一には、人文科学の側から自然諸科学との間の溝をいくらかは埋めることができるはずである。もちろん、向こうの方からやってくることはないかもしれないが<sup>5)</sup>。第二には、こうして基礎づけられた理論をもとにすることで、自然科学や人文・社会科学、あるいは芸術的な創造活動といった境界区分を行なうことなく、これまでほとんど顧みられることのなかった人間の知的・美的な創造力や問題解決といった精神の活動を、まずは総体として捉えることができるはずである。そして、それらが社会あるいは世界においてどのような役割を果たしてきたのか、果たしうるのか、また個別の歴史的な事象に際してそれらがいかに関与してきたのか、さらには、それらが個々の人間のうちにどのような感情や生理的反応を、いかなる過程を経て呼び起こすのか、といった問題にさえ取り組むことが可能となるであろう<sup>6)</sup>。これは、最終的には科学（自然

諸科学と社会・人文学)や宗教、芸術、文学——あるいは娯楽や遊戯などの活動も加えてよいであろう——といった精神性をともなう活動の諸領域の機能や役割の差異あるいは類似点を、あらためて浮き彫りにすることにつながるであろうが、それはおそらく、現在の段階でのそれらについての理解の内容とは、ずいぶんと異なったものになるはずである。

別のことで言い換えてみよう。人文科学、社会科学では、自然科学のように自然界の物理的な諸現象の原理を解明したり、新たな行動や認識の可能性を実現するための技術の開発などをめざすのではなく、社会や自然界についての人間自身の認識や、人間が自然、環境あるいは世界全体との間に持っている無数の関係の意味や変化に対して、その関心を向けることができる。それらの関係性は、社会的な規範や制度・慣習といったものだけでなく、文学や言語体系、芸術創作などを含むさまざまな知的、美的、精神的な要素から成り立つものであり、当然そこでは科学的な知も重要な位置を占めている。ここでいう科学とは人文、社会、自然諸科学のすべてを含んでいる。また、そのような世界の認識あるいは世界との関係性は決して普遍的なものではなく、各々の地理的環境、社会的状況や思想、学問あるいは創作上の文脈など、個別の歴史的布置との関連の中にあってはじめてその意味を理解することができるものであるし、またそのように理解することが人文・社会科学の常道でもある。こういった点を考慮してみると、生物学的な知見をもとにして人間の認識作用や問題解決の過程に関する基本的な理解を得ることは、人文・社会科学にとっては、いわば二重の意味で「認識についての認識」を行なう、という立場を意味することになるわけである。二重であるとは、すなわち、生物学的に見た人間の認識作用の過程についての認識、および、個別の文脈や状況の中に位置付けられた認識についての歴史学的な認識、ということである。後者はもちろん前者の認識をその前提として必要とするものであり、後者のみでは十全な考察は行ないえない。つまり、この二重の意味での「認識についての認識」を実践していくことが、自然科学とは異なる人文・社会科学の重要な課題となっているのではないか、ということなのである。

本論の以降各章においては、この困難な課題に取り組むために必要な学問上の基礎部分を構築してくれた過去の研究者や著述家たちの例外的な著作をとりあげて、それらの現在にいたるまでの成果を確認すると同時に、今後の展開の方向や可能性についても、いくつかの提案を試みたいと思う。

## 2. ふたたび、C. P. スノーから

自然科学者や技術者と人文系知識人との間の断絶状態を指摘し、そこから生じている望ましくない状況に対して公共の場で体系的な批判を呈した最初の人物は、おそらくC. P. スノーである。その著書『二つの文化と科学革命』には、彼が1959年に行なった講演の内容とその後のいくつかの論説、さらにスノーの見解に対する当時の各界の人物からの意見があわせて収録されている<sup>7)</sup>。その表題からも明らかなように、この著作の中でスノーは二つの文化の問題、すなわち科学・技術の領域と文学・批評の領域の間の問題だけでなく、これらと科学革命——ここでは科学革命とは産業革命以後の工業技術の開発に科学的な知識を応用するようになったことを意味しているのであって、T. S. クーンの提唱したような知的なパラダイムの転換という意味ではない——との関係をテー

マとしている。本論では、彼の主張の主要な部分についての再考から始めることにしよう<sup>8)</sup>。

スノーはまず、(講演が行なわれた1959年の時点での) イギリスやアメリカにおいては、二つの文化の間の折り合いが悪いために、我々は思想や創造の核心部において最上の機会のいくつかを逃してしまい、なおかつ危険な社会的状況を生じさせてもいる、と論じている。つまり、我々は科学の成果やその問題解決の手法を理解しなければならないし、科学は我々の心が体験するすべてのものと、社会制度と、あるいは芸術や文学とも同化されなければならない、しかも重要なものとして無理のないかたちで同化されなければならないはずである。ところが、専門化されすぎた教育制度のために、人文系知識人と科学者の間の知的交流はおよそ不可能となり、また応用科学や技術者に対するアカデミズムの評価が全般的に低いために、有能な技術者や科学者を必要十分な数だけ養成できる状況にもない。さらには、科学者がどんなことを問題としているかが分かるぐらいの科学的知識を備えた政治家や官僚あるいは社会全体を作り上げることさえも困難である、と批判したのである<sup>9)</sup>。これらを踏まえたうえで、スノーはさらに「工業化は貧しい人々にとって唯一の希望である」という科学革命の意義を理解できない人々の倫理感を疑問視する。同様にまた国際間の問題としても、工業化の進んだ国々の国民はますます富み、工業化の進まない国々の国民は現状維持が精一杯である、という状態を改善するためには不可欠であるはずの、専門の科学者や技術者養成に向かうことのない(イギリスの)教育制度に対して、苦言を呈するのである<sup>10)</sup>。そこで、こういった事態を改善するために彼が要請したのが教育制度の改革であり、より正確には、次の世代の人々は何としてでも分子生物学を学ばねばならぬ、という提言であった：

「この新しい学問は、宇宙の微小な部分にだけ適用され、それも地球上にのみ限られるかもしれない[...]。だが、この微小な部分こそ、たまたま生物の生命に関わりのあるものであるがゆえに、われわれ各人に重要なのである。[...] 分子生物学という科学の分野が、ダーウィン以来のあらゆる科学の進歩を遥かに越えて、またおそらくダーウィンによる科学の進歩以上に、人間が自分について考える方法に影響を与えるであろうということである。

[...] 分子生物学のように人間の骨肉に緊密に関わりのあるようなもの、さらにはもっと高等な神経系の性質に関して期待できるようなもう一つの進歩は、当然われわれの希望にも諦めにも関わりを持ってくる。つまり、人間は自分自身について深く反省するようになって以来、自分に具わっている特有の性質のあれこれに推測をめぐらしたり、時には優れた直感を示したのである。[...] このような知識の革命が何をもたらすかは、誰にも予言できないが、その一つの結果として、われわれが人間としての同胞に抱く責任感は、強くこそなれ、弱まるなどとは私には信じられない。」<sup>11)</sup>

つまり、このような認識上の革命によって、恵まれぬ状況の中で生活する他の世界の人々の存在が理解され、また同時に科学(革命)を普及させねばならない理由も理解されることであろう、とスノーは想定していたわけであった。

こういった主旨のうち、スノーがその見解を公表した時代やイギリスという国家に特有であったと思われる問題、例えば応用科学や技術教育の大学における軽視、あるいは工業化や科学革命の意義に対する無理解や反感——現代でも高度産業化社会の害悪というものに対する反感は存在する

が、それはスノーの時代とはすでに異なった意味を持ち、異なった文脈で示されている<sup>12)</sup> —— といった点は除くにしても、それ以外のいくつかの要請については、現在でもまだ傾聴に値するといえるであろう。とりわけ、人文系知識人と自然諸科学の分離状態に関する洞察、そして生物学や神経生理学といった人間自身に関わる学問の成果を理解することでその溝を埋めることができるという考え方、さらには、これによって「人間が自分について考える方法」が新たなものになるはずであるという指摘は、同意されることはあっても否定されることはありえないであろう。実際のところ、これらは現在でもまだ未完のままに残されている重要な課題でさえあるのだから。

では、こういったスノーの提言に対して、生物学者の側ではどのように応えているのか。『二つの文化と教育』と題された論説において、生物学者ジュリアン・ハックスリーは、スノーに対してたんに肯定的な見解を示したのみならず、さらに進むべき方向性を示唆してもいる。これによると、まず科学の側において「生物学は、物理学や化学に比べて非常に貧弱な現状[...]から脱して、重要な、信頼のおけるものとなりえよう。結局、生物学は人間を生命の他のものと結び付け、精神を物質と結び付ける」役割を果たすことになるであろう、という<sup>13)</sup>。さらに、科学は自分の歴史にもっと注意を払うようになるはずであり、また「文学的伝統主義者の側でも、歴史というものは、もっと適切な意味で強調されるようになろう、つまり価値の歴史、科学と学問の歴史、芸術と宗教の歴史、社会制度の歴史などが取り上げられ、これらがどう関連するかが示され、特に、科学は一般に知識や理解を探求するものの一部に過ぎないこと、知識の程度というものが価値や信念を含むすべてのものに影響を与えることが示される」ようになるであろう、と論じたのであった<sup>14)</sup>。J.ハックスリーのこの予言的な提言のうちのいくつかは、すでに現実のものとなっている。生物学はいまや物理学や化学と比肩しうる分野となり、さらに多くの専門領域へと分化しつつ、種々の生物の知覚世界や生命現象の過程について理解を与えてくれる最も重要な科学となった。そして、一例を挙げるならば、哺乳類の脳の発達過程に関する理論に導かれ、検証によって裏付けられた知識を有する生物学者は、「人間が自分について考える」ことを実践するに際して、次のように述べさえるのである：

「我々は自らの「現実性」(＝一定の種に属する生物の脳が独自に創り上げる種固有の外部世界の像)を、視覚や聴覚を介して行なうのと同様に、言葉や文章によって形成する。そして、人間の言語の融通無碍ぶりは、想像力の発展のための比類なき道具にもなりおおせてしまうところにあるのだ。それによって、シンボルの無限の組み合わせが、ひいては可能世界の想像上での創造ができるようになるのである。[...]こうした活動(＝芸術、文学、神話創造、自然科学といった人間活動)は、すべて人間の想像力に負うものだ。いずれも、現実の断片をつなぎ合わせて、新しい構造や状況や概念を作り出すのである。そして、技術の発達に示されるように、世界像の変化は、現実の物質界の変化を引き起こすことができるのだ。」<sup>15)</sup>

この所見はさらに、人間の脳が系統発生史的に獲得した想像力というものが、さまざまな歴史条件のもとで、さまざまな方法で、常に新たにその「生物学的現実性」を文化的に構成していく点に、人間という生物種の特性のひとつがあると考えるべきである、という見解へとつながっていくので

ある。このようなテーゼにいたるまでの知覚器官と脳や神経組織の機能についての興味深い生物学的な論証については、残念ながらこの場で詳解することはできないのであるが、しかし、以下の点についてだけは確認しておきたいと思う。つまり、上記のような生物学者の見解は、人文科学で通常想定されているような「形而上学的な思弁」とはいくぶん異なった手続きを経て措定されたものである、ということ、そしてそれにもかかわらず、人文学者が人間の社会や世界あるいは創造活動の成果を論じる際に有用な認識上の枠組みを与えてくれると考えられるものである、ということである。実際に上記のような見解が文学研究にとってどのように援用されるのかについては、後の章で言及することにして、まずはJ.ハックスリーの提言に戻ろう。彼によって人文・社会科学の側に要請された歴史の再検討についてはどうであろうか。現在のところ、それが種々の科学論や科学史、各々の学問分野の研究史として、あるいは文学・芸術や諸制度の社会史といった領域で個別に実践されていることは確かである。しかしながら、それらを総合して、人間の多様な創造活動や探究・発見の歴史的な変遷の過程をひとつの共通の座標の上で考証し、各々の実践形態や認識作用、問題解決の独自の意味とそれらの間の差異を知ることが可能となるためには、すでに述べたように、まず、知的あるいは美的な創造性や認識作用がいかなる機構のもとに働いているのかを明らかにしておかねばならない。少なくとも、十分に信頼に足るような資料と理論とに基づく論証のモデルが必要なのである。さて、現在までにいわゆる「文学的知識人」としてこの「人間の創造性を解明する」という課題に取り組んだ人物はいなかったのであろうか。

### 3. アーサー・ケストラー『創造活動の理論』の重要な意義

ひょっとするとケストラー自身は、文学的知識人に分類されることに対して大いに異議を唱えるかもしれない<sup>16)</sup>。しかし、ジャーナリスト、小説家・著述家であり、社会活動家であり思想家でもあった人物を、自然科学の研究者と呼ぶことはできないであろう。また我々にとってみれば、科学と文学・芸術の間の境界線や諸学問の間の狭量なセクト主義をやすやすと乗り越え、かつ稀有の業績を上げることに成功した人物がこちら側の「陣営」の中にも存在していたことを誇りうるのは、心強いことである。アーサー・ケストラーの三つの著作『創造活動の理論(上) 芸術の源泉と科学の発見』、『創造活動の理論(下) 習慣と独創力』、そして『機械の中の幽霊』<sup>17)</sup>は、現在までのところ「人間の創造性を解明する」という課題に精力的に取り組んで有意義な成果を挙げている、唯一の研究であるといってよいだろう。そしてケストラーはこの研究を、そもそも人間の精神や創造性を考察の対象外とした自然諸科学に対する反発、特に行動主義心理学の根強い伝統に対する反発から開始しているのである<sup>18)</sup>。

ケストラーの創造性に関する理論は、その三つの著作の中で終始一貫して主張されている「バイソシエーション(bisociation)」という一見単純にも見えるような概念で基礎づけられている。それは、伝統的・歴史的には相互にまったく関連のないものとして定型化した、それぞれに統一性を持つ二つ以上の異なった認識の枠組みの中に、何らかの共通する状況や論理や概念を認識し、それら二つあるいは複数の準拠枠(マトリックス)の間の対立を克服して、新しい次元で融合していくことが

創造の本質である、と考えるものである<sup>19)</sup>。ケストラーは、人間や高等な霊長類の知的活動における「バイソエーション」が、通常の対象認知の過程や言語による思考過程、あるいは一般に（ネズミによる実験などで）想定されている試行錯誤による問題解決などとは異なった次元において機能している高度な知性の作動であることを、例えば、ゲシュタルト心理学の創始者の一人であるヴォルフガング・ケーラーがかつて行なった、ある優秀なチンパンジーについての実験の結果をもとにして論証するのである。その実験とは以下のようなものであった：

「(十四年二月十七日) 柵の向ふ側に餌を置く、手は届かない。こちら側の実験室の奥には挽き目を入れた蓖麻の木を立てて置く。その枝はたやすく折り取れると云つていい。木を柵の間から押し出すことは、枝が出張つてゐるので出来ない[...]。ズルタン(チンパンジーの名前)を連れてくる。初め餌を見ない。[...]餌に注意させられて、柵に近づき、外を一瞥したが、次の瞬間には向きを更へて、まっすぐ木に向つて行き、細い長い枝を掴んでポキンと折り取るや既に柵の所に急いで戻つて、餌を取った。木の方へ向き直つた時から、折り取つた枝で果物を引き寄せるまでの経過は、一纏りのしかも速やかに結了した一聯の行動であつて、即時的に云つて解決に資しない様な些少の運動も些少の「隙間」もないのである。[...]」

課題を解決するに機械的にやつてのける人間の成人に対しては、多くの場合、さうして又今の場合も、ここに行はれた行動が自明のものではなくて、一の相當な仕業であることを證明する必要がある。最初興へられてゐる全體としての木から枝を折り取る事は、單なる棒使用以上の仕業を意味する。この事は既に棒の使用は知つてゐるが併し天賦にてズルタンに劣つてゐる猿によつて、直ちに示されるのである。<sup>20)</sup>

ケストラーは、この天賦あるチンパンジーが「葉のついた木の曲つた枝が、地面に横たわる真っ直ぐな生命のない竹の棒と、何か共通なものを持っていることを発見した。その二つが共通に持っているものは、非常に少ない。両方とも「堅そう」で「やや長い」といえる。しかし、それだけである。はじめは、その木の主要部分であつた枝は、その視覚的意味合いから、もぎとられ—— 比喩的にまた文字通りに言つて—— もう一つの機能的な意味合いの一部にされたのだ。[...] そのチンパンジーが、実際に枝を折るまえに、その枝を、同時に両方のマトリックスをもつもの—— いぜん木の一部ではあるが、すでに分離した道具でもある—— として知覚した瞬間があつたに相違ない<sup>21)</sup>と考察する。そして高次におけるこのような新しい統合は、人間の場合、それが行なわれた特定の状況下において、すなわち歴史的・社会的な状況下において、何らかの価値を持つような斬新さをとまなうものであるならば、新しい冗談やユーモア、新しい科学の仮説や理論や技術、新しい獨創性あふれる芸術作品などとして現われる、というのである<sup>22)</sup>。つまり、ユーモアの創造、知的な思考や発見、芸術における獨創性といった互いにあまり関連性がないように思われる種々の創造的な行為が、実はひとつの共通の機構によって進行している、ということである。そしてその機構を、彼は次のように説明するのである：

「精神はその極限に置かれると、ごく稀に、驚くほど獨創的な、半ばアクロバットの様な芸当をやつて



のける。そしてそれが科学や芸術の革命的な躍進を、あるいはまったく形の違う新しい展望をもたらすことがある。しかし革命には建設的な側面だけでなく、破壊的な側面もある。科学における「革命的な」発見とか、芸術の様式における革命的な変革とかを口にする時、われわれは暗にその破壊的な側面を説いている。破壊はそれまで神聖で冒すことのできなかつた教義や、思考習慣にまでなつた一見明白な思考の原理を放棄することによつてもたらされる。創造的な独創性と職人的なルーチンをわれわれに見分けさせるものが、これである。[...] 創造的な独創性には、常に知識の破棄と再学習、ご破算とやり直しがある。そこには石化した精神構造の粉碎と、もはやその役目を終えたマトリックスの破棄と、別のマトリックスの再統合がある。言い換えれば、創造的な独創性とは、精神ヒエラルキーのいくつかのレベルを巻き込んだ、ディソシエーション(分離)とバイソシエーションの複合作用である。[...] 創造的プロセスの決定的な局面では、理性的な統制は弛められ、創造者の精神は専門的な思考から一般的で流動的な精神作用に「退行する」。これは、例えば、明確な言語的思考から漠としたヴィジュアル・イメージへの後退などに、よく見られる。」<sup>23)</sup>

こういった創造活動の内的過程に加えて、ケストラーは、すぐれたユーモアによつて引き起こされる「笑い」、革新的な科学の発見によつて引き起こされる「わかつた！」という感動（これはさらに「笑い」を誘発したり「感涙」にいたることもある）、偉大な芸術作品や悲劇によつて引き起こされる「カタルシスの涙」という、それぞれ異なつた原因によつて生じる三つの情緒的反応の、それぞれの生理的な機能（自律神経系の働き）と意味、およびそれらの深層における共通点を、神経生理学の知見と多くの例証とを通じて明らかにする。そしてこれらのすぐれた創造活動(creation)の産物が、発見者や創造者の側だけでなく、それらを受け取る（再-創造 re-creation、そしてこれは「娯楽」をも意味する）側の人間にもまた同様の認識上の革新と生理的反応を引き起こすことを示したのである<sup>24)</sup>。言い換えるならば、ユーモアを創造し理解することは、新たな関係性を発見したり理解したりすることであり、それはまた、美しいものを創り出し、美しさに感動することでもある、というわけである（そして付け加えるならば、創造性と情動についてのケストラーのこの理論を越えるものはいまだになく、それは現在でもまだ妥当性を失つてはいないといえる）。

これにとどまらず、ケストラーはさらに、この創造的な独創性というものが、すぐれたユーモアの持ち主や芸術家、科学者の精神の内だけでなく、あらゆる進化発展の過程の全体に偏在すると考える。彼は、生物諸種の進化の形態（特にネオテニーすなわち幼形進化というプロセスが強調される）から思考能力や高度な身体技能を含めたさまざまな行動や学習・発達の形態、さらには社会組織の形態にいたるまでを視野に収め、それらの中に見られる構造を分析し、それらがどのようにして変異を繰り返し、有用でかつ実現可能であるような変革を成し遂げて高次の秩序化を果たすのかを、多くの例証をもつて説明するのである。そしてこういった創造性についての洞察をさらに発展させることで、ケストラーは最終的に「ホロン(holon)」という概念を用いた独自のシステム理論を構築するにいたる。それは、ルートヴィヒ・フォン・ベルタランフィが生物の組織や生態系の説明に使い、後には一般システム理論の基本的な概念として提唱することになつた「階層的秩序」と「開放システム」<sup>25)</sup>という二つの概念を綜合することで形成された、ケストラーが開放階層系(Open Hierarchic System)と呼ぶ概念によつて基礎づけられるものである<sup>26)</sup>。ケストラーが説明する

その開放階層系においては、絶対的な全体や部分ほどのレベルにも存在しておらず、認識されるのは、下位のレベルに対しては全体であるかのように見え、上位のレベルに対しては部分であるように見える双面的 —— これを彼はヤヌスと呼ぶ —— な中間構造だけである。ケストラーは、見方によっては部分にも全体にも見えるこの「亜全体」、それぞれの階層的なまとまりをホロンと名付け、そして、任意の階層レベルやあらゆるタイプの階層系に共通にあてはまる構成原理をこの概念によって明らかにしようと試みたのである<sup>27)</sup>。階層系におけるこのような部分と全体の関係においてさらに強調されたのは、創発(Emergence)という概念である。これは、全体には部分に分解されると消失するようなある特性が存在するという概念で、ケストラーの場合には、それぞれの階層における全体性を諸要素に分解してしまえば階層的構造が消失してしまい、その階層に特有であった性質もまた失われてしまう、ということである<sup>28)</sup>。こういった観点から、彼は還元主義的な立場に強く反対し、次のように述べている：

「もちろん科学者が複雑な現象をその構成要素に分解することはきわめて正当なことだし、必要不可欠でもある。ただし、分解の過程でかならず何か本質的なものが失われるという事実認識があつてのことだ。全体は部分の総和以上であり、全体の属性は部分の属性より複雑である。それゆえ複雑な現象の分析は全体像の断片ないしは側面を明らかにするだけで、それをもって「…にすぎない」などと言えるものではない。[...] もしそれを文字どおり受け取るなら、人間は究極的に90%の水と10%の鉱物に「すぎない」となるが、いくら真実とはいえ、あまり有益な話ではない。」<sup>29)</sup>

言い換えるならば、物理学的なレベル、生物学的なレベル、精神活動のレベルあるいは社会的な組織のレベルといった、より高次へと続いていく諸階層の普遍的な「構造」については、「ホロン」や一般的なシステムで説明が可能であるとはいえ、その階層の性質はそれぞれのレベルに特有のものであり、その特質を明らかにしたり他のシステムとの比較によって相対的に評価したりするためには、それぞれの階層において、下位のいかなる諸要素から上位の全体性がいかにして創り上げられるのか、創り上げられているのかを見極めることが必要である、つまり、各々のレベルにおけるシステムの理解と説明のための概念と理論が必要である、ということなのである。いわば、ここにおいて当初の創造性の原理を考察する立場へと再び立ち返ることになるわけである。

さて、このようなケストラーの著作によって、二つの文化の断絶という問題の解消も不可能ではないことがはっきりと示され、またそのあるべきかたちのひとつが提示されもしたのであった。階層の各レベルを説明する理論や概念のさらなる洗練化という方向の他に、もし次に取り組むべき課題があるとするならば、それは歴史学的なもの、すなわち、個々の歴史状況において創造性がどのような準拠枠を「ディ&バイソシエーション」してきたのか、その創造や問題解決の成果は歴史的にどのように位置付けられるのか、それがなされた時代においていかなる意味や「価値」を有し、いかなる情緒性をともなっていたのか、そして社会構造や人間の世界認識に対してどのような影響を及ぼしたのか、といった問題を、個々の科学的・技術的な発見、芸術作品や文学作品の創造、宗教的世界観の構築過程などにおいて詳細に追究していくことであるといえよう。そこで以降では、人文・社会科学、とりわけ文学研究と社会史研究において、上記のような観点や問題設定の方法を積

極的に採用し、かつケストラーの考察の方向をさらに発展させ洗練させてもいる、より新しい研究の成果について考察していくことにしたい。

#### 4. カール・アイブル『ポエジーの発生』における生物学的側面

ケストラーによる人間の創造活動の原理についての研究の成果は、その後しばらくは別の人間によって引き継がれることも、また発展させられることもなかった。その代わりに学問全体の要請として注目され、急速な発展を見ることになったのは、ケストラーとベルタランフィが提言し、またその基礎を確立した、一般システム理論という研究分野である<sup>30)</sup>。しかしこの一般システム理論は、かつてケストラーが行なった以上に有益なかたちで人文研究の分野に取り込まれた——あるいは将来において取り込まれる——とはおよそ言い難いものであった。これが果たされるためには、一般的なシステムについての一般的な理論ではなく、人間による世界認識の方法についての説明が、あるいは「社会システム」および「心理システム」のそれぞれのレベルに焦点を合わせた概念と理論とが必要であったからである。そこで、このような理論として非常に洗練されたかたちで提唱されたのが、ニクラス・ルーマンの『社会システム理論』<sup>31)</sup>であった。そして、ルーマンによって厳密に定義づけられた社会システムおよび心理システムのレベルに適用可能な理論と諸概念を説明の基礎概念として援用することによって、「ポエジー(Poesie)」——これは文学(Literatur)とも詩作・文芸(Dichtung)とも異なる概念であり、いわば「創り出すこと、創り出したこと」という、その語源となるギリシャ語の意味に近いものとして理解されねばならない<sup>32)</sup>——の人間の世界認識の過程における発現を人類学的・生物学的に、そして近代の社会におけるその成立の意味を社会学的・歴史的に説明しようと試みたのが、カール・アイブルの『ポエジーの発生』である<sup>33)</sup>。アイブルの考察は終始一貫して目的論的であり、彼が明らかにしようとするものは、次の問いに集約されている。それは解釈学が常に避けて通るものであり、一方、進化理論にとってはその出発点をなすものである：

「人間が作り出してきたものの中に、ある種の言語構造物の集合体が存在している。それらは何の役にも立たないし、その自律性や無目的性が時には賞賛され、また時には非難される。その言語構造物は何の指示も与えないし、王や神を称えもしない、自然や社会生活について情報を与えるわけでもない(それでもこのようなことをしているとしたら、その言語構造物はそれによって別のことを言っているのであろうと思われる)。さらにこの言語構造物は、約200～250年前から、次第に大きな意義を獲得するようになってきた。そして当然のことながらそれ以来、この言語構造物を生産するために多くの努力が払われてきた。それらは次第に、非常に重要なものと見なされるようになっていったのである。なぜなのか？」<sup>34)</sup>

こうして、この研究においては、著者アイブルが冒頭で宣言するように、かつてエミール・シュタイガーが「文学研究(Literaturwissenschaft)の状態は奇妙である。それを行なっている人間には学問・科学(Wissenschaft)が欠落しているか、あるいは文学(Literatur)が欠落しているのだ」<sup>35)</sup>と述べた

状態 —— そして現在でもまだこの状態は継続中である —— の克服が、きわめて大胆なかたちで試みられるのである。本章では、最初にこの「どうして、何のために？」という目的論的な問いに対する解答の生物学的な側面に目を向け、これを簡潔に説明していくことにしよう。

アイブルはまず、人類（ホモ・サピエンス）という生物種の発生の特性を、生物学的な進化と文化能力の間の正のフィードバックにあるとする。アウストラロピテクスと比して3倍にも肥大した現代人類の脳の約3分の2は、その機能の脱特殊化によって、文化的環境がどのようなものであっても学習によって適応・調整できるようになった。しかし逆に、文化を学習することによって遺伝的気質と文化的調整の協同（Kooperation）が果たされるまでは、決して人類化が完了したとはいえない、というのである。このような観点からすると、文化（Kultur）という語はまさに「耕す」というその語源どおりの意味を持つといえるであろう、すなわち、大脳皮質の表面に「畝を盛り上げ、溝を刻み込む」という意味において。またこの人類化においては、各人の遺伝的気質によって、および学習した文化によって異なってくる協同がその「人物」となり、その人物の行動や体験となるわけだが、遺伝的気質と文化的調整の間には常に矛盾や衝突が生じるために、さらに、両者の間の境界線として調停を行なわねばならない三番目の要素が現われる。この境界線が現われて「以来、我々は決断の自由という主観的感情を持ち、内面の葛藤を知覚し、[...]“意識”を持つ<sup>36)</sup>ようになったのであった。そしてアイブルはこの過程を、ポール・D. マクリーンの「三つの脳の進化」という学説<sup>37)</sup>に沿って、身体の本能的反応や情動を司る大脳辺縁系と、複雑な情報を集約・還元し知識として記憶する、つまり理性や思考、言語を司る大脳新皮質との関係から説明するのである。この本能・情動作用と理性的な精神作用との関係は、前述のケストラーにおいては最終的に人類にとっての危険要素として位置付けられていた<sup>38)</sup>。しかしアイブルはこれを肯定的に受け止める。つまり、感情がなければ我々はどのような重大な決断も下すことができない、なぜならば、情報の量は純粋に合理的な決断に必要な充分な程度には決して達しないからである。いうなれば、決断の最後のひと押しをするのは感情なのであり、したがって感情は、その前合理的な起源（爬虫類および下等哺乳類の脳）にもかかわらず、より高レベルにある後期の脳部（高等霊長類の脳）によって統合されており、機能という点では新たに規定し直されているのである、と考えるのである<sup>39)</sup>。そして、大脳新皮質で知覚することはできても直接処理することのできない、つまり合理性には還元されえないこの感情と、情報を抽象化して扱う言語との関係は、さらに次のように追究されるのである：

「よく知られている“魂が語りだすと、その時にはすでに、ああ！ 魂はもはや語ってはおらぬのだ（Spricht die Seele, so spricht ach! schon die Seele nicht mehr）”という体験には、明らかに確たる神経生理学的な原因があるのだ。そして、言語コミュニケーションにおいて少なくとも間接的にも感情を参照できるためには、特別な手段が必要なのである：メタファーの使用、“言葉にできないもの”の存在を信号として示すような、言語と対象との関連の明示的破壊、さらには出来事の経過についての単純で無感情に見える報告、あるいは対象のたんなる名指し[...]。聞き手の側では、これらの表現を、そういった複雑な感情（不明瞭な全体という気分）を誘発するものとして前提にすることができるのだ。人の系統発生史の初期の段階において、すでに叙情詩のようなものが発展していたであろうこと、また一般的に、その叙情詩のようなものが“言葉にできないもの”と言葉で付

き合うための重要な範となっていたであろうことは、考えてみてもよいだろう[...]」<sup>40)</sup>

この大脳辺縁系は、人間においてはさらに「遊びの快楽」の源泉という機能を司ってもいる。動物の場合、大脳辺縁系からの情報が作り出す緊張状態は、身体・生命を守るための本能的反応や情動作用が引き起こす行動（怒りによる攻撃や恐怖による逃避など）といった、その時々々の時空間における行動へと直接持ち込まれる。しかし、人間や他の霊長類の場合はこれとは異なり、まず第一に、衝動によらない自由行動というかたちで、攻撃や逃避といった遺伝的行動プログラムの諸部分を創造的に組み合わせた非本来的な活動を行なうことがある。例えば、生命維持に関わるような行為目的とは乖離している「追いかっこ」や「おにごっこ」、各種の運動競技などを考えてみればよい。そして第二に、特に人間の場合には、この大脳辺縁系の状態は大脳新皮質との結合によって「意識」に到達するものであり、それ自体がすでに知覚の対象となっている。もちろん人間の場合でも、現実には身体・生命の安全を脅かす状況などに直面した場合には、大脳辺縁系からの刺激は直接的な行動に結び付く情動作用として働く。しかし人間は、自分自身の存在を危険に晒すことなくこの部位を刺激し、これにともなって生じる本来的ではない緊張・興奮状態を自分自身のうちに「感じ取る」ことができるのである。実際は安全であるはずの遊園地の「恐い乗り物」に乗るとき、あるいは手に汗を握るような他者の行動や状況を見たとき、またはそれらを叙述する文章を読んだときに「ドキドキする」という事態を考えてみればよい。そして我々には、このようにして非本来的に感情を掻き立てることが、そしてその緊張状態を解放することが、まさに快楽として知覚されるのである。つまり、遊びとは感情という遺伝的気質を文化的なシンボルレベル（現実の危険性や身体反応、行動を必要としないレベル）で呼び起こし、「意識」がこれを安全な立場で知覚することである、といえるのだ<sup>41)</sup>。さらにこの遊びの快楽は、他の人間が遊んでいる（play/spielen 演じている、すなわち非本来的な行動をしている）状況に参加し、これを眺めることによっても同様に享受される。例えば劇場や競技場の状況がこれに相当する。アイブルは、この状況は同一化や感情移入といった考え方で説明できるものではなく、「むしろ重要なのは一種の刺激または解放感の“寄生”である」と分析するのである<sup>42)</sup>。もちろん、どの程度の安全性を確保できるのか、いかなる行為やシンボルがどれほどに洗練された遊びの快楽を生じさせるのかといった点は、またそれぞれの文化によって異なっているのであるが。

一方、遺伝的気質と文化的調整の協同そして「意識の成立」によって人類化が完了し、いわば一個の「心理システム」が成立すると、それとともに、そのシステムに対する環境として「世界全体」が対置されることになる。この世界全体の無限の複雑性は、まず、生物としての人間の知覚器官が認知できる情報からなる生物学的現実性<sup>43)</sup>へと還元される。人間の場合、この生物学的現実性の複雑性は、さらに文化によって「意味」を与えられて選択される——これはまた名付けることでもある——ことによって還元され、合理的な現実の領域として構成されていくのである。しかしながら、この選択性は常に「それ自身を意識している」ものであり、よって常に、意味の境界と選択されない——名付けられない——余剰部分とを同時に扱わねばならないことにもなる。それは、偶然のものであるにせよ必然であるにせよ、選択によって生じる差異を常に「意識」するのであり、選択されない余剰部分が存在することを同時に指し示すのである。そして、すべての現実構成の行

為とそれが作り上げる領域の地平線にすぐに接するかたちで、常に「可能性の領域」が位置していることを指し示すのである：

「つまり、我々の体験と行為とは、多少なりとも明確な“意識”に伴われているということである。すべてのものは何か別なようでもありえるのだ、ただ、どのようであるかを知らないだけだ、という意識に、そしてこの“世界”は世界の一つの断片にすぎないのだ、という意識に。」<sup>44)</sup>

この可能性の領域は、生物としての人間には知覚しえないが物理学的あるいは天文学的にはその存在が確証されているような実在の領域によって占められているだけではない。そこはむしろ、別のもの、不確定なもの、未知のもの、到達できないもの、論理的な真偽の判断を超越したもの、恐れや希望あるいは未来といったものが示唆する未だ顕在化していないものなどの領域である。このような領域をアイブルは「非世界(Nichtwelt)」という概念で規定するのである<sup>45)</sup>。そして、この非世界と付き合うための重要な生物学的感覚として人間が持っている能力こそ、先にケストラーが優秀なチンパンジーを例にして示した「関係性を解消して新たに構成する」能力、つまり空想力あるいは想像力なのである。詳しくいうと、それは、対象と直接的には関係を持たずに「中枢神経系の働きによって空間の再現前化(Repräsentation)」を行ない、かつ「別なようでもありえるかもしれない(es könnte auch anders sein)」というモードで思考する能力である<sup>46)</sup>。中枢神経系において再現前化された空間(事物の関係性)は、人間の場合には叙述機能を持つ言語によってその構造化をさらに強化しうるために、時空を隔ててもなお再現前化が可能である。後者の思考のモードについては、例えばドイツ語の場合、助動詞なども非本来性を明示する機能を持つが、より直接的に非世界の事態を参照していることを明示するのは接続法の第2式である<sup>47)</sup>。また先に「複雑な感情を誘発するもの」として述べられた言語の用法も、非世界を言語で参照する方法のひとつである。これらをまとめて言い換えるならば、人間はたんに世界の事物の関係性について「別なようでもありえるかもしれない」というモードで思考することができるだけでなく、その思考の内容を言語によって構造化(テキスト化)し、さらには文字化や韻文化を通じてその「テキストの結束性」を強化することによって、時空を超越して他者に伝えるコミュニケーション能力を持つ、というわけである。

上記のような人類、ホモ・サピエンスという生物種の特性についての考察に基づいて、アイブルはポエジーと非世界の間を次のように説明していく。まずポエジーは、遺伝的気質を非本来的に活性化させて知覚するという遊びの快楽、現実の関係性を解消して自由に結合し直す空想力、時空を隔てて再現前化を可能にするコミュニケーション・メディアの存在、という人間の性質を前提とする。そして、これらを基礎として、現実の諸要素(とりわけ未解決の諸問題など)を異化しながら——非本来的であることを示しながら——反復することで、非世界の領域の言語による構造化が行なわれていく。これによって「ちがったふうでもありえる」ということが指し示されると同時に、ポエジーは問題を解決せねばならないという世界の要請から自由になり、またそこには、選択された問題がどれほど真摯なものであっても、必ず上述したような遊びの要素がいくらかは存在することになるのである。しかしながら、こうして創り上げられるのは、世界と非世界を同時に主題としているために、やはり現実の未解決の諸問題を省察するひとつの手段とならざるをえないよ

うな言語構造物である<sup>48)</sup>。そしてその言語構造物は、世界の地平の向こう側に位置する非世界を暫定的に世界の関係性の中に結び付けることによって、まったく未知で空虚な非世界よりはいくらか良いものを創り出して代替する、という役割を果たすのである。例えば、死後の世界や地球外生命体などというものについて、何もわからないという最も恐ろしい状態よりは、こうであるかもしれない、などと示される方が良い。そしてそのような「かもしれない」という説明は「事実であれ」という要請とは無縁であるために、人間が空想して興奮しながら楽しむことができるものなのである。

世界と非世界を同時に主題とし、両者の境界を顕在化するプロセスは、このようなポエジーの他に、特に科学と宗教の領域において集約されている。研究あるいは科学という名のもとで進んでいるのは、一方では、科学的な知によって基礎づけられた本来的な陳述によって世界の領域を拡大し、その合理的な構造化をはかっていくことであるが、他方では、未来化することによって未解決の問題の影響を緩和することも、つまり「我々はそれを知ることになるのだ」あるいは「我々は未来の知識によって未来の問題を克服するであろう」という問題解決の先送りも同時に行なわれている<sup>49)</sup>。宗教は、「非世界についての本来的な陳述であれ」という要請を掲げて非世界を世界に取り込んでしまい、これによってあらゆる問題の解決を提示していると主張すると同時に、その解決の内容についての省察や再考を抑制し、また未解決のことについては沈黙している<sup>50)</sup>。もし宗教がこの要請を放棄してしまうと、それはポエジー、すなわち非本来的な陳述と変わらぬものになるのである。アイブルによれば、「自分がポエジーではないといたいならば、宗教は、復活や三位一体や処女出産などがたんなるメタファーではなく事実であると、少なくとも神秘ではあるということを主張し、これに固執しなくてはならないのだ。そして、こんなもののために人々は殺されてきた」<sup>51)</sup>のである（もちろん殺されてきたのは「人々」ばかりではない。すべて地上のものは神によって人間のために創造され提供されたのだ、という実に都合のよい人間中心主義的な説明のために「自然」もまた殺され続けてきたのである）。この宗教、ポエジー、科学という区別を生み出してきたのは、近代以降に進行した社会の諸機能がサブ・システムへと差異化していく過程——本論の冒頭で述べた自然諸科学と人文科学や芸術諸分野の差異化もその一部であるような過程——である。そして、非本来的な陳述というその主導的差異 (Leitdifferenz) に沿ってポエジーが分離独立したのは、おそらく啓蒙主義とそれに続く近代科学——皮肉なことに、この科学はそもそも神が人間のために創造した世界の「合理性」を解明することをめざしていたはずなのだ——によって宗教的陳述の本来性が次第に失われざるをえなくなり、これと機能的には等価であるような「未解決の問題を取り扱う方法」を必要とする状況が出現して以来のことであろう、と推測できるのである。しかしながら、この過程をさらに追究していくには、本章で概観してきた生物学的な説明ではなく、これらを踏まえた上での、それぞれの文化についての歴史学的な説明が必要となってくる。

## 5. 文学研究における生物学の必要性

ここまでで紹介してきた二つの研究の成果は、人間の創造行為や認識作用はどのように機能して

いるのか、という問題についての我々の認識を新たにしてくれるものであった。これによって、本論の第1章で確認した課題のひとつである「生物学的に見た人間の認識作用の過程についての認識」のための出発点が設定されたわけである。現在までのところ、このような学問の境界線上に位置する研究がきわめて例外的であり、また実践が難しい性質のものであることは、もちろん否定できない事実である。しかし、A. ケストラーやK. アイブルが援用した諸々の生物学の理論や情報は、文学研究を行なう人間にとってさえ決して難解なものではなく——もちろん、仮に難解であったとしても、それを理由にして避けて通ることは絶対に許されないが——、自然科学の専門家でなくとも容易に理解できるものである。それは彼ら自身が実践を通じてすでに証明してくれている。したがって、彼らの成果を出発点として、これを修正し発展させていくことは十分に可能なのだ。そしてそれは、二つめの課題である「個別の文脈や状況の中に位置付けられた認識についての歴史的な認識」を適切なかたちで果たしていくためにも必要なのである。もちろん我々は、これらの課題を果していくことを通じて、人間もやはり地球上の生物の一種である——C. P. スノーのいう「同胞」の範囲をほんの少しだけ拡張するのだ——ことを、また人間がたんなる機械的な構造物ではなく精神を持つ存在であることを、これまで以上に明確に意識するようになるであろうし、その意識はさらに、自らが生きる世界についての省察を深めていくための新しい思想的な基盤の形成へとつながっていくはずである。

(『文学研究——生物学的、歴史的(2) 社会とメンタリティ』に続く)

## 注 釈

- 1) ここでは代表的な傾向として、科学者集団の機能や構造分析を通じて、科学的知識が生成される過程を政治・社会制度や文化的規範などとの関連から捉える科学社会学(例えばJ. D. バナール『歴史における科学』みすず書房、1966年など)、および規範的科学の通常期と科学革命の時期とに区別して、理論発展の過程をパラダイムの基盤をなす科学者集団の役割という点から捉える科学論(T. S. クーン『科学革命の構造』みすず書房、1971年)などを想定している。一方、科学者を中心とするこれらの研究とは異なって、西欧世界におけるキリスト教と近代科学、技術の関係を分析した啓発的な著作としては、村上陽一郎『文明のなかの科学』青土社、1994年などが挙げられる。
- 1a) ゲシュタルト心理学による認識作用の分析は、第3章で扱うアーサー・ケストラーに大きな影響を与えている。特に対象の「形」ではなく「動き」、つまり「変形」によって知覚を説明した点は重要である。また行動主義の心理学とは異なって人間の精神や心理を排除しなかったフロイト心理学も例外的である。だが、その思想を合理的に基礎づけるような生物学・生理学的な知識と理解(特に人間に関する)を前提にできなければ、それは理論や説明概念として不十分であろう。
- 2) ジュリアン・ハックスリー『二つの文化と教育』、199ページ(C. P. スノー『二つの文化と科学革命』みすず書房、新装第1版、1999年所収) ここでは、人間の精神を否定するところから開始された行動主義の心理学に対する批判も同時に行なわれている。
- 3) ごく少数の、ほとんど注目されていない例外的な研究の成果、著作の内容については、後の章で取り上げていく。またここでは、たんなる形而上学的な思弁にとどまるもの、その観点や価値付けが独善的あるいは教条主義的であると言わざるをえないものは、初めから考慮外である。



- 4) 本来ならば「認識」ではなく「認知」という概念を用いるべきであるのかもしれない。しかし本論では、知る働きと知りえた成果の両方を意味し、かつ事象の意味を理解することを表すドイツ語 *Erkenntnis* に相当する語として「認識」を選択した。また「作用」という概念は、認識が主体と対象の相互の関係性にに基づき、かつ相互に種々の影響を及ぼしあうものである、という意味で用いている。
- 5) 理論物理学や数学の最先端の専門用語や諸概念をその学問上の文脈から切り離して、文化研究やテキスト解釈あるいは思想や批評の道具として持ち込んだ人文系の評論家や思想家たちが、第一線の自然科学者からどれほど手痛い反論を受けているかは、サイエンス・ウォーズ論争や自然科学者たちの『「知」の欺瞞』といった攻撃的著作を見れば明らかである。しかし、本論で以降に採り上げる著者たちが積極的に利用している生物学上の知見に関する限り、自然科学者からこのような攻撃を受ける危険はない。なぜならば、彼らは考察対象を論じる際に、基本的に生物学、正確には進化理論や神経生理学、大脳生理学といった分野だが、完全にそちらの文脈に持ち込むという手法を取っているからである。もし批判を受ける点があるとすれば、それは「情報が少しばかり古すぎるのではないか」というものになるであろうが、その場合には新しい有用な研究成果を提供してもらえばよいだけである。なお、サイエンス・ウォーズについては主に以下の文献を参照：『現代思想』1998年11月号(サイエンス・ウォーズ特集)；A.ソーカル他『「知」の欺瞞。ポストモダン思想における科学の濫用』岩波書店、2000年
- 6) このような姿勢に対しては、学問上の境界侵犯ではないか、という批判があるかもしれない。しかし、以降の章でも示すように、生物学的知識の利用は文学研究にとってきわめて有用であり必要である。少なくとも、人間を生物体であると見なすならば、生物学は文学研究にとってまぎれもなく学問上の隣接領域であり、かつ「重要なものとして、無理のないかたちで」取り込まねばならない。また次のような考え方に倣うならば、そのような批判もいくらかは緩和されるであろう：「研究の各々は、他の科学者の研究についてはきわめて無知なまま行われる。しかしそれにもかかわらず、そのような研究の結果がどのようにして科学の体系的統一を維持するのであろうか。[...] 科学者は各々、有望と思われるさまざまな場面で他の研究者の研究を学び、さらに、自分の特殊な才能をいかにしてもっともよく利用しうるかを考えてきた。このような方式が実際には全体としての最大の進歩を可能にし、そして相次ぐ進歩の諸段階で、科学の体系的な性格をもっともよく確保するのである。」マイケル・ボラニー『暗黙知の次元。言語から非言語へ』紀伊國屋書店、1980年、106ページ
- 7) チャールズ・パーシー・スノー『二つの文化と科学革命』みすず書房、初版1967年、新装第1版1999年
- 8) なぜ、いまごろになってスノーに注目せねばならないのか、という当然の疑問に対しても、いちおうは答えておく必要があるだろう。これは直接の回答とはならないかもしれないが、まず上記書籍の出版年(新装第1版1999年)に注目していただきたい。つまりその疑問は、なぜいま新たにスノーの著作を出版し直す必要があるのか、という疑問と同質なのである。その理由としては、どうやら現在では、彼が提起した諸々の問題は解決されるどころかいつそう複雑化して膨れ上がり、彼が予想していた状況をはるかに越える新たな局面に突入していると考えられることができるのだ。例えば、人文・社会科学と自然科学の断絶状態は、部分的には上述のサイエンス・ウォーズに象徴される段階まで進んでいると見ることができる。これは人文学者と自然科学者の対立というよりも、むしろ科学史家や科学のカルチュラル・スタディーズと自然科学者との対立であるとも考えられるので、余計にたちが悪い。あるいは、スノーのいうところの「科学革命に対する理解の要請」は、現在では完全に「自然環境や生態系に対する理解の要請」へとその方向を変えているわけだが、その本質にある問題性は深まりこそすれ、決して薄れてなどいない。つまり、種々の生物の存在様態や地球の生態系、自然環境の仕組みなどと人間の生活との関係についての科学的な知識、あるいは一部の豊かな社会を支えている産業活動(とりわけ20世紀後半以降の)が招来するであろう近未来の地球規模での破壊的状況に対する正確な理解とより良い実践形態の模索、このようなものが、およそ社会全体に対して、かつてないほどの強烈な切実さをもって

要求されているのである。これらの問題に直接答えることが本論の主旨ではないものの、本論で提唱する文学研究の立場は、いずれこれらの要請を意識にのぼらせざるをえないような性質のものである。

- 9) スノー、26-30,45-56ページ
- 10) 同書、38-41,58-70ページ
- 11) 同書、102,104ページ
- 12) これは、現在では諸学問あるいは各研究分野間の軋轢や工業化の促進という観点からではなく、地球環境や資源浪費、経済格差や民族紛争という観点からとりあげねばならない問題である。この点を追求するならば、同じ古典的著作であっても、E.F.シューマッハー『スモール・イズ・ビューティフル. 人間中心の経済学』講談社学術文庫、1986年 をその出発点とするべきである。シューマッハーはスノー同様に発展途上国への支援を要請しているが、その根底にある考え方はまったく逆で、科学技術と産業社会の病根を指摘し、地域の特質にふさわしい小さな経済流通や産業構造のかたちを提言する。その他、この問題に関する近著としては、次のようなものがとりわけ重要である：クライブ・ボンティング『緑の世界史』(上/下)、朝日選書、1994年；デイヴィッド・アーノルド『環境と人間の歴史. 自然、文化、ヨーロッパの世界的拡張』新評論社、1999年；イギリスが停滞していた間、ドイツで大学における応用科学の重視やその成果の工業化が促進されていたことは歴史的に確認されている。その背景は、潮木守一『ドイツ近代科学を支えた官僚. 影の文部大臣アルトホーフ』中央公論社、1993年 に詳しい。
- 13) ハックスリー、200ページ
- 14) 同書、200ページ
- 15) フランソワ・ジャコブ『可能世界と現実世界. 進化論をめぐる』みすず書房、1994年(イギリス語版刊行は1982年)、81-84ページ。なお、著者のジャコブは1965年にノーベル医学生理学賞を受けたフランスの分子生物学者である。
- 16) ジョージ・ミケシュ『ふだん着のアーサー・ケストラー』晶文社、1986年、120ページには、次のように記されている：「(イギリス)王立文学協会の会員になった話をしていたとき、彼(=ケストラー)は「文学」の一語がよけいだと言った。もちろん彼はただの王立協会の会員になりたかったのだ。そっちのほうが決定的な敬意の証拠 —— 科学者たちによって、まともな科学者と決定的に認められたことになるからである。だが、誰か実力者が邪魔をしていたのだった。」こういった出来事からも、人文系知識人と自然科学者の対立状況の一端がうかがえるであろう。
- 17) アーサー・ケストラー『創造活動の理論(上) 芸術の源泉と科学の発見』ラティス、1966年；同『創造活動の理論(下) 習慣と独創性』ラティス、1966年；同『機械の中の幽霊』ペリかん社、1969年
- 18) 特に、ケストラー『機械の中の幽霊』1-5ページ、13-32ページ参照。またこの書の表題は「人間の心や精神は果たして肉体という物理的機構の中にひそむ幽霊のような実体のないものに過ぎないのだろうか」という意味の反語的な問いかけである。
- 19) こういった観点からは、現代の「最新」のメタファー理論も得るところが多いのではないだろうか。
- 20) W.ケーレル『類人猿の智慧試験』岩波書店、1938年、110-111ページ。なお、日本語訳の出版年が古いために表記も旧字体であるが、原文はそのままのかたちで引用した。また著者 Köhler は現在ではケーラーと記すのが通例であるので、本文中ではこれにならった。
- 21) ケストラー『創造活動の理論(上)』、102-103ページ。例えば構想(Konzept)という語のそもそもの意味、つまりラテン語の *con-cipio* 「(いくつかのものを)一緒に掴む」が同時に「理解する、心に思い描く」という意味を持つことを考えると、優秀なチンパンジーは人間と非常に近い(しかも言語によらない!)認

識の手段を有していることが推測できる。

- 22) このような創造性の発現についての見解は、T.S.クーンのいう知的パラダイム転換に類似してはいなくもない。だがケストラーの場合、多くの事例をもとにその機構の解明にまで踏み込んでいる点、および科学の領域だけにとどまらない視野の広さという点で、クーンなどとは比較にならない意義を持つ。ここでは言及できないが、ケストラーは多くのユーモアや科学的発見、芸術作品を例として挙げて分析することによって、その論証を行なっている。
- 23) ケストラー『ホロン革命』工作舎、1983年、241-242ページ
- 24) ケストラーは三つの情緒的反応を「HaHa-反応＝滑稽だ」、「Aha!-反応＝理解した」、「Ah...-反応＝感動した」と呼び、それらの共通性と漸進的に移行する関係に注目した。この人間の情緒的反応についての考察は、人間性についての深い洞察を与えてくれる、きわめて有益なものである。
- 25) L.v.ベルタランフィ『生命・有機体論の考察』みすず書房、1954年；同『一般システム理論・その基礎・発展・応用』、みすず書房、1973年を参照。特にその29-74、118-145ページに詳しい。
- 26) ケストラー『機械の中の幽霊』451-461ページに「開放階層系(OHS)の一般的性質」としてまとめられている。また後に『ホロン革命』(原題は“Janus”)の中でより詳細に論究されている。
- 27) 同書、71ページによると、holon はギリシャ語で「全体」を意味する holos に「粒子」や「部分」という意味を表わす接尾辞 -on を付けた造語である。
- 28) ケストラー『ホロン革命』51-53ページ。ただしケストラー自身は、この用語そのものは用いていない。
- 29) 同書、53ページ。また次のようにも述べている：「性的な動機が、いや時には糞便に関することでさえ、芸術作品に入り込む可能性は大いにある。しかし、芸術は目標が阻害された性的行為に「すぎない」などと主張するのは馬鹿げている。そうした議論は、ゲーテの作品が他の早漏芸術家の作品と違ってなぜ天才的なのかという問題に答えていない。芸術的創造力を性ホルモンの働きで説明しようという試みは、無益としか言いようがない。」同書、51ページ。「性的な動機」は、人間の場合は決して生物学的な次元だけの問題ではなく、より「上位」である社会的な次元にも大いに関係している。とはいえ、芸術作品に関するケストラーのこの見解は基本的に正しい。
- 30) ジェラルド・M.ワインバーグ『一般システム思考』紀伊國屋書店、1979年；ピーター・チェックランド『新しいシステムアプローチ・システム思考とシステム実践』オーム社、1985年などを参照のこと。なお後者には、先に挙げたL.v.ベルタランフィやA.ケストラーの著作の他に、多くの分野にまたがるシステム論関連の研究成果が参考文献として紹介されており、その意味では役に立つ。
- 31) Niklas Luhmann: Soziale Systeme, Suhrkamp, Frankfurt a.M. 1987(邦訳:ニクラス・ルーマン『社会システム理論』恒星社厚生閣、1993年(上巻)、1995年(下巻)) なお、ルーマンの理論が以下のアイブルの著作においてどのように用いられているかは、ある程度その理論に通暁しているものにとっては自明であると思われるので、特に言及はしない。またこの点が不明なままでも本論の理解に支障はない。
- 32) 文学には、特定の価値を明確化して具体的に例示することで、社会・文化的な安定と統合に役立つことをめざす教訓的・寓話的なものと、不確定で問題である事柄を示して不確定性や非決定性を意識させるものの二種類が考えられる。以降において明らかとなるが、ポエジーとは特に後者のことである。
- 33) Karl Eibl: Die Entstehung der Poesie, Insel, Frankfurt a.M. 1995. この著作がドイツで刊行されたのは、私事になるが、ちょうど筆者がミュンヘンに留学し、当地の大学で研修を受けていた時期であった。そしてその当時、筆者をそのゼミナールに参加させて下さった Fotis Jannidis博士が、これもまた偶然のことではあったが、実は同書を発刊するための Karl Eibl教授の研究会の参加者の一人であった。こ

のJannidis博士のいうところでは、文学研究にはテキスト解釈の他に進化理論、システム理論それにメンタリティの概念、つまり言い換えると生物学と歴史・社会学の基礎的な理論を知っておくことが必要だ、ということであった。以前からケストラーの著作に学びつつも、他には同様な方向での発展的な研究に出会えずにいた筆者にとって、このような著作の発見や斬新な考え方の出会いは大変な驚愕であったと同時に喜ばしい体験でもあった。これもまた「石化した精神構造の粉碎と、もはやその役目を終えたマトリックスの破棄と、別のマトリックスの再統合」の一例であるといえるだろう。

34) Eibl,S.7-8

35) Emil Staiger: *Die Kunst der Interpretation*, Zürich 1961, S.12. この発言を「二つの文化の対立」のアナロジーであると見ることもできる。

36) Eibl,S.13. この部分がアイブルの論証の要であると同時に弱点でもある。以降においても示されるアイブルが採用した理論と説明概念は、外界からの感覚刺激をすべての運動の原因と見なす求心性の理論(行動主義など)と、末梢ではなく中枢神経系に由来する運動を主体は知覚するという遠心性の理論との間の生理学・心理学上の伝統的な対立や、またこれに類似した経験論と生得論という学習・発達についての神経生物学的な理論の対立などを既に克服しているものである。しかし「意識」だけは、今のところ内観によってのみ参照されるものであり、内観は生理学や生物学の手法ではないために、現在はこれらの学問によって確認できない領域に属するのである(否定されているわけではない)。さらに、アイブルのここでの見解にしたがうならば、意識や精神が脳部に局在するかのように考えられてしまう。しかし意識や精神は、自己の内的状態と同時に自己の身体状態とその環境との関係も認識しており、また様々な能動的行為を通じて無限の環境の中に意味を探索し続けていくことで、世界像を構成すると同時にその認識作用(および身体行為)自体をも次第に洗練させ複雑化させていく。そのような機能を果たすものは、たんに(心理)システムの内的構成要素であるにとどまらず、むしろシステムと環境との相互作用をなすシステム境界であるというべきで、敢えていうならば、全身体と環境との関係性がそれに相当するということになる。とはいえ、これも実証に基づく生理学と心理学の理論の新たな成果を待つ必要がある。したがってここでは、精神や「意識」の機能についての合理的な説明と定義づけがシステム理論的に行なわれていることで満足せねばならない。なお、本論注釈43も参照のこと。

37) ポール・D.マクリン『三つの脳の進化。反射脳・情動脳・理性脳と「人間らしさ」の起源』工作舎、1994年を参照。なお大脳辺縁系は内臓脳とも呼ばれる。つまり、怒ったときに「腹が立つ」などと言う場合にも、それはたんなる比喩的表現ではなく神経生理学的な原因があると考えてもよいのである。

38) ケストラーは、三つの脳が調和せぬままに階層的に並列する人類の状態は進化論上の「致命的な失敗」であるとし、理性による統制が不十分なまま怒りや恐怖に任せて核ミサイルの発射スイッチを押しかねない人類を、種全体の滅亡の危機に瀕する「狂気の人(ホモ・マニアクス)」と呼ぶ。ケストラー『機械の中の幽霊』450ページ参照。彼は自身の戦争体験からの他に、コンラート・ローレンツ『文明化した人間の八つの大罪』思索社、1973年などの生物学者の影響を受けてもいる。現在では、人類とは、さだめし欲望のままに地球の資源と緑を食い尽くして滅びていく「食欲の人」といったところであろうか。

39) Eibl,S.24

40) Ebd.,S.25. 同様なことはルーマン『社会システム理論(下)』515ページにおいても指摘されている。

41) Ebd.,S.18. チンパンジーも人類同様に他者の冒険的行為や試行錯誤を見て興奮することが、ケーレル『類人猿の知恵試験』182-188ページにおいて実に明確なかたちで示されている。

42) Ebd.,S.20

43) 本論第2章の引用文(注釈15、フランソワ・ジャコブ)を参照のこと。また、このような心理システムとその

環境についての定義は、環境を知覚することと自己を知覚することの相補性についてのより新しい研究成果、例えばジェームズ・ギブソンやその後継者らによって提唱された「アフォーダンス(affordance)」という概念によっても裏付けられる。アフォーダンスとは、環境における事物の物理的性質でも、認識主体の主観が内的に構成するものでもない。それは、いわば「生物にとっての環境の性質」であり、環境が生物に対して提供する「価値」である。前述のチンパンジーの発見的行為も、結局は新しいアフォーダンスの発見であったということができる。佐々木正人『アフォーダンス —— 新しい認知の理論』岩波書店、1994年を参照。ただし、ここで重要なのはあくまでもその「発見」の過程の方である。

- 44) Ebd.,S.16. アイブルは、ここにおいて進化的考察とシステム論的考察が一つの収斂点に到達しているから見なしている。
- 45) Ebd.,S.16. 逆に「世界(Welt)」は、遺伝的気質に合わせて文化的な定義づけにより調節されたもの、つまり論理的説明によりその意味が明確化されている領域、ということになる。世界と非世界をまとめると「全体」あるいは「汎」とでも呼ぶべきものになる。
- 46) Ebd.,S.21. アイブルはここではW.ケーラーのチンパンジーではなく、K.ローレンツのオランウータンの実験を例に挙げているが、どちらでも同じである。
- 47) Vgl.Eibl,S.14. その他に wissen, glauben, vermuten などの動詞も選択性を明示する。これらとは別に、世界の事物の状態・関係を陳述する平叙文が「本来的的」とするならば、その機能を果たさない疑問文はすべて非本来的的であるともいえる。疑問文はすべて、その機能という点で観察した場合、話者にとって不確定な状況や不本意な事態の解消を相手に要求する(ここに非世界が現われる)要請文である。疑問詞を付与したり語順やイントネーションを変更したりすることによって、それが現実の事態や関係の変更・解消を要求するものであることを明示するのである。他にも、言語の陳述形態によってではなく、テキスト全体に虚構性、非本来性の信号を付けて示すこともある。注釈48を参照のこと。
- 48) Vgl.ebd.,S.17,27,31-33. 非世界についての発言には、常にメタ言語的な否定の信号や非本来性の信号が付与される。それがここで言う「異化(Verfremdung)」であり、刺激論の延長上に位置するようなロシア・フォルマリズムのいう異化効果ではない。「異化」には、小説であること、虚構の物語であることなども含まれる。また、非世界を参照するための素材に適しているのは世界の未解決の諸問題である。どの未解決の問題もそれ自身ですでに「我々の知らない、あるいは支配の及ばない別のものがまだある」ということを含意しているからである。そういったものとしては、現実でないものがすべて含まれるが、例えば特に、解決できない矛盾、実現できない夢、未踏の場所、地球外生命体、死、誕生、愛、社会、運命、世界の起源や終末等々を数えることができるであろう。
- 49) Ebd.,S.26. 「いずれは問題解決のための知識や技術を手に入れるであろう」という未来化を行なっていると同時に、それでもやはりポエジーであるという点で、サイエンス・フィクションというジャンルは文芸の中でも非常に独特である。
- 50) そのひとつの例は、ユダヤ/キリスト教の伝統における神とは何か、ということである。この未解決の問題に対しては、「全知全能」という符号を付与することですべての問いが封じ込められてしまうと同時に、これを直接に名指しすることも禁じられている。
- 51) Ebd.,S.33. 創世期に記された神の世界創造のくだりを、神話や比喩ではなく科学的に説明できる「本来的陳述」とであると主張して、種々の「科学的」論証を交えながら進化的理論を否定する現代の「創造論」は、ポエジーであることを拒否して科学であることを選択しながら、それでも依然として宗教であるという点で、実に興味深い立場を示している。鶴浦裕『進化論を拒む人々』勁草書房、1998年参照。

(博士後期課程)